

間木堤における白鳥飛来数の推移及び 環境創造への取組み

姥名幸政・松林拓大

039-2136 上北郡下田町字中下田147-16、下田町白鳥保護監視員、しもだ白鳥を愛する会
039-2129 上北郡下田町字中下田135-2、下田町教育委員会社会教育課、しもだ白鳥を愛する会

はじめに

間木堤は、青森県南部の下田町に位置する、面積約11.3ha、貯水量約84,000 t の農業用かんがい用水溜池である。下流域には水田地帯が広がり、その水田地帯を潤す用水溜池として古くから重要な役割を果たしている。

昭和39年以降、地元町内会の類家一郎氏（故人）の餌付け活動により、現在では600羽から700羽のハクチョウが飛来している。日本野鳥の会により実施されているガン・カモ・ハクチョウ類定点調査では、平成14年1月に544羽（オオハクチョウ538羽、コハクチョウ6羽）、平成15年1月には607羽（オオハクチョウ599羽、コハクチョウ8羽）であり、この時期における青森県内の単独湖沼としては最大飛来数を記録している。

この間木堤へ飛来するハクチョウは、将来へ向かって優雅に羽ばたいていくという意味を込め、昭和59年には下田町の鳥として指定されている。

また、昭和57年には、間木堤及び周辺の水田地帯を含む約250haが、青森県鳥獣保護区、更に平成5年には間木堤西側約1,727haが休猟区、平成12年には間木堤東側約

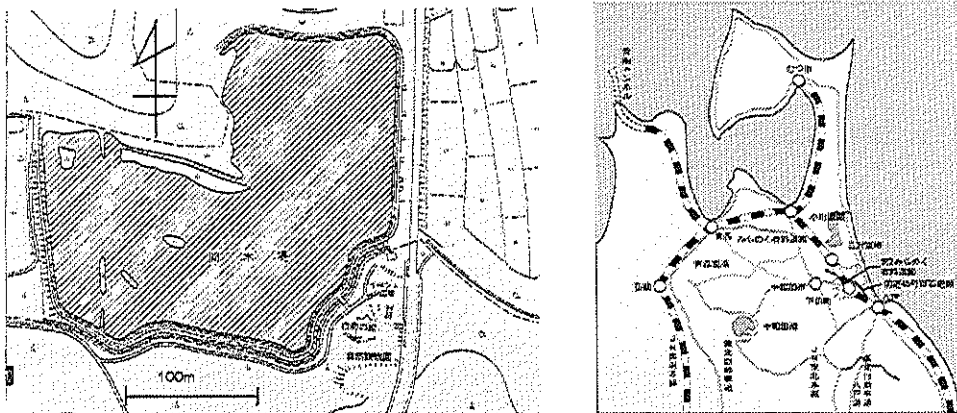


図1. 間木堤位置図.

Yukimasa EBINA and Takuhiro MATSUBAYASHI. Fluctuation of numbers of swans wintering in Magi-tsutsumi and conservation of wintering site.

174haが銃猟禁止区域に指定されている。

間木堤におけるハクチョウ飛来数の推移

間木堤では、平成4年度より下田町白鳥保護監視員（以下、監視員）によるハクチョウ飛来数等の記録を行っている。ここでは、平成9年度から平成13年度におけるハクチョウ飛来数の推移について紹介する。

なお、この期間における記録は、現監視員の姥名幸政による計測である。羽数の計測についてはカウンターを用い、毎朝7時の定時におけるハクチョウ飛来数を計測したものである。

平成9年度。最大飛来数：平成10年2月2日、640羽（平成10年1月10日に飼いイヌが間木堤に落下。コハクチョウ(Y118)、3月6日、オナガガモ(10A-16238)、3月26日確認）（図2-1）。

平成10年度。最大飛来数：平成11年2月7日、721羽（オオハクチョウ(4C77)、11月27日、オオハクチョウ(4C93)、1月14日確認）（図2-2）。

平成11年度。最大飛来数：平成12年2月26日、576羽（図2-3）。

平成12年度。最大飛来数：平成13年3月2日、570羽（平成13年2月26日、間木堤の水割り作業を実施。オオハクチョウ(4C73)、10月30日、コクチョウ、12月11日か

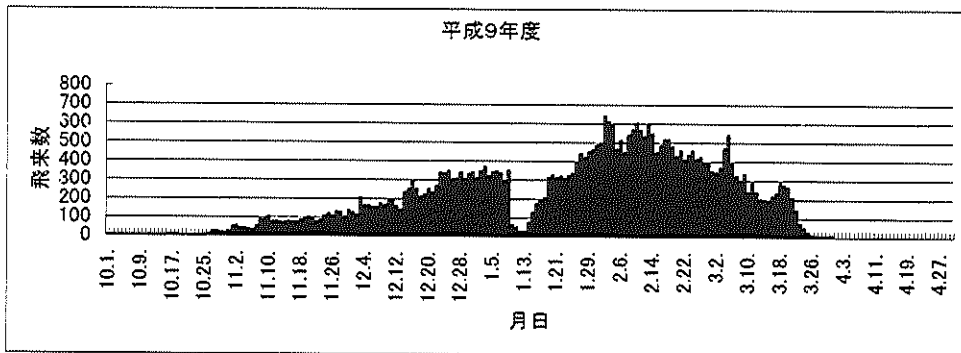


図2-1. 間木堤におけるハクチョウ飛来数の推移. 平成9年度.

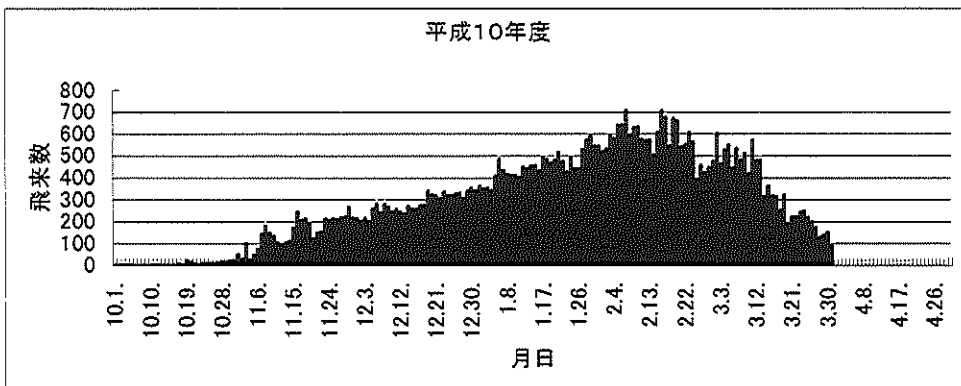


図2-2. 間木堤におけるハクチョウ飛来数の推移. 平成10年度.

ら31日まで確認) (図2-4)。

平成13年度。最大飛来数：平成14年3月8日、591羽(図2-5)。

この5年間の飛来数の推移を比較すると、いくつかの特徴を挙げるができる。

1) 初飛来日が若干遅れ、しかもその際の飛来数が増加しているのではないか

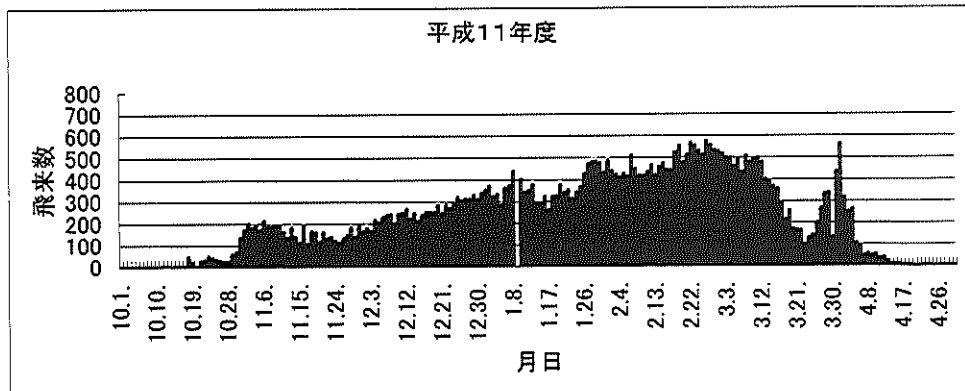


図2-3. 間木堤におけるハクチョウ飛来数の推移。平成11年度。

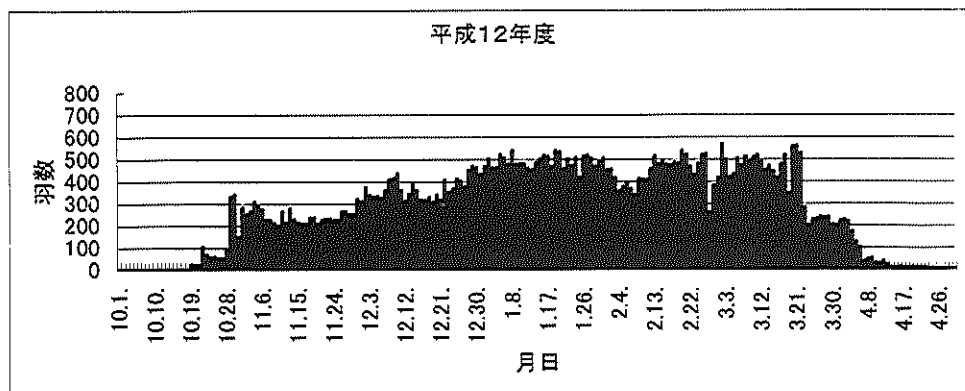


図2-4. 間木堤におけるハクチョウ飛来数の推移。平成12年度。

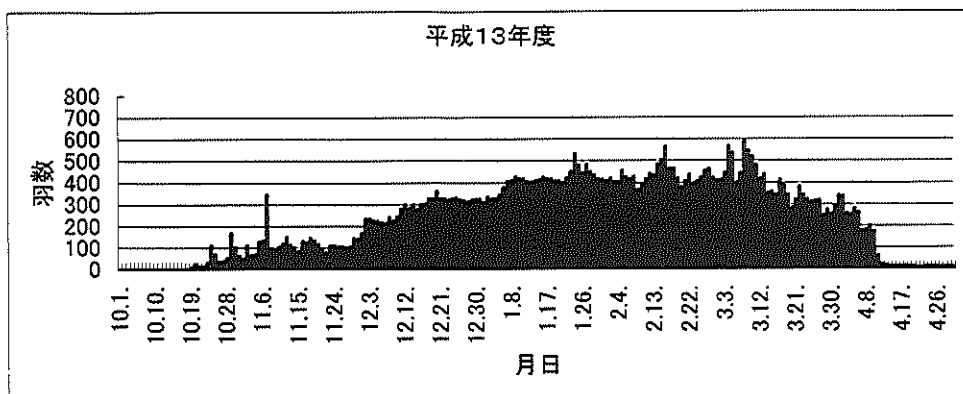


図2-5. 間木堤におけるハクチョウ飛来数の推移。平成13年度。

表 1. 間木堤における初飛来確認日

年 度	初飛来確認日	飛来数(羽)
平成9年度	平成9年10月16日	8
平成10年度	平成10年10月17日	9
平成11年度	平成11年10月18日	51
平成12年度	平成12年10月19日	27
平成13年度	平成13年10月19日	13

表 2. 間木堤における最大飛来数確認日

年 度	最大飛来数確認日	飛来数(羽)
平成9年度	平成10年2月2日	640
平成10年度	平成11年2月7日	712
平成11年度	平成12年2月26日	576
平成12年度	平成13年3月2日	570
平成13年度	平成14年3月8日	591

表 2. 間木堤における春期(3月31日)の飛来数

年 度	春期	飛来数(羽)
平成9年度	平成10年3月31日	7
平成10年度	平成11年3月31日	91
平成11年度	平成12年3月31日	436
平成12年度	平成13年3月31日	205
平成13年度	平成14年3月31日	294

(表 1)。

2) 秋に南下する際、間木堤を中継地とするハクチョウが多くなっているのではないか。平成9年度のグラフを見ると、10月上旬から11月にかけて急激な飛来数増加は見られない。しかし、平成10年度以降、この期間には必ずといってよいほど飛来数増加が見られ、しかもそれは複数回にわたっている。

3) 間木堤における飛来数ピークの時期が遅れているのではないか(表 2)。

4) 間木堤において、春期の飛来数が増加しているのではないか。平成9年度と10年度の2年間は、4月1日以降の記録が存在しないため、単純に他年度と比較することはできない。できるだけ純粋に比較するため、3月31日時点での間木堤におけるハクチョウの羽数を比較する(表 3)。

間木堤におけるハクチョウの死亡要因

間木堤周辺を中心とする地域で死亡したハクチョウについては、監視員及び町職員が出動し、これを回収している。回収の際には、監視員による死亡要因の推定がなされ、その内容は記録として残る。

ここでは、平成9年度から平成13年度におけるハクチョウ死亡数及びその死亡要因等について考察する。

自然死と推定される死亡個体のほとんどは、オオハクチョウでありながら体重6kg未満であった。

電線事故死については、間木堤周辺に設置されている電線にぶつかって落下し、死亡したものである。間木堤付近の電線には目印となる旗が取り付けられているが、それでも死亡事故がなくなることはなかった。なお、平成14年11月、間木堤東側の電線を更に東へ約30m移動させたところ、平成14年度には電線事故死の死亡例は確認されていない。

ルアー事故死については、死亡したものと確認された事例は1例のみであるが、実際にはルアーが引っかかっている個体はいくつか確認され、そのほとんどを管轄の農林事務所へ引き渡している。そのような確認例は、平成11年度には3例、そして平成12年度には9例にのぼっている。

鉛中毒と推測される個体については、「水を飲まない」あるいは「けいれんのような動きをしている」という行動により推測したものである。より確実に死因を特定するのであれば、レントゲンや解剖などを行うことが必要であると考えられる。

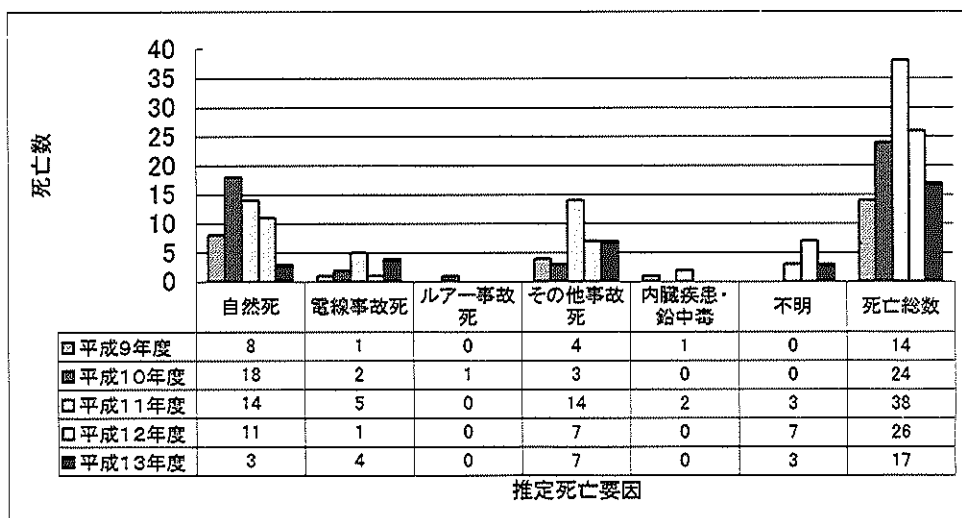


図3. 間木堤における白鳥死亡数の推移およびその推定死亡要因。

環境創造への取組み

①マコモ栽培事業

従来間木堤には、沿岸帯を中心にマコモ群落が発達していたが、護岸工事及び浚渫工事により、マコモ群落の多くが消失した。

このマコモ群落を回復させるため、平成11年度より休耕田でのマコモ栽培を行っている。生育したマコモ株は、間木堤沿岸帯へ移植している。

②人工浮島設置事業

水鳥の休息地及び植生基盤を創造するため、平成14年度に人工浮島を試験的に設置している。人工浮島は水位変動に対応できる点が最大のメリットである。しかし、水鳥の休息場所としては機能しているが、植生基盤としては、植栽したマコモ株を水鳥によって引き抜かれてしまうため、対策が必要である。

③ボランティア団体「しもだ白鳥を愛する会」の設立

監視員の業務や町の事業をサポートするためのボランティア団体として、有志による「しもだ白鳥を愛する会」が平成13年に設立した。

具体的な活動としては、間木堤清掃、マコモ栽培、パン切り作業等を行っている。

④しもだ白鳥フォーラムの開催

ハクチョウをはじめとする水鳥などの生物にとって、より望ましい環境を創造し

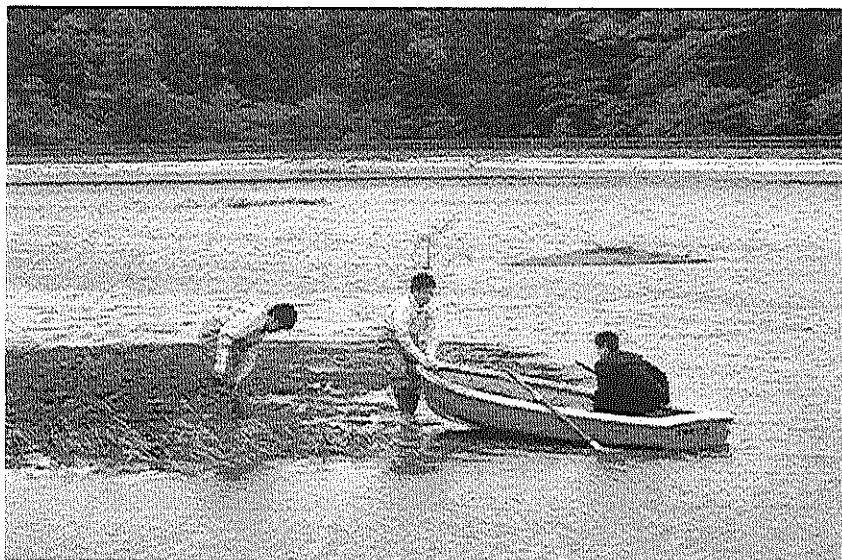


図4. 間木堤へのマコモ株移植.



図5. 人工浮島の試験的設置.

ていくためには、行政サイドだけの考えによる事業展開ではなく、関係者及び専門家との積極的な意見交換を行い、その内容に基づき事業を展開していく必要があると思われる。

この考えから、平成13年度より、「しもだ白鳥フォーラム」を開催している。こ

町から村から



4

十一月三十日、今一 留置の声。この日も監視
ズン最初の白鳥の死とい 所には姥名さんの友人が
う悲しい出来事の直後 集まり、餌買い出し中
も、白鳥おじさん、姥名 留守番をしたり、昼食の
幸政さんの手が休 用意を怠らぬとして、姥
まることばない。正午す 各々入の手助けをしてい
きには、東北ネットのテ た。たまたま監視所に立
して番組に電話で生出演 ち寄った袴田健彦下田町
した。間木堤は北東北有 長も「姥名さんはとも
数の白鳥の飛来地として 熱心。間木堤と白鳥を愛
知られるだけあって、真 心して見てもらえよう」と
内だけでなく県外からの 信頼を置く。
取材も舞い込む。
「一人で三人分の仕事 をしている」「何でも一
生懸命。手を抜かない」
とは、姥名さんに対する

姥名さんに応援し、少
しでも仕事の軽減に協力

町民ボランティア

「協力したい」会発足

餌の調達や清掃など手伝う



「しもだ白鳥を愛する
会」の会員らが間木堤
の清掃で集めたごみの
一部

理人の馬場福志さんは
「活動が足りず海まりにな
らないように、会員がで
きる範囲で餌を届けてあげ
ていきたい。餌の
運搬、パン切り・袋詰め
監視所の留守番など何で
もいい」と話す。

今年はその活動として
十月に間木堤の清掃を行
った。堤の中、周辺のニ
チームに分かれ、ビニ
ール袋、ペットボトル、農
薬の容器など、軽トラッ
ク二台半分のごみを集め
た。
未だく白鳥が飛来する
自然環境を守るため、今
後は白鳥の好物マコモの
栽培にも取り組むたい考
えだ。

「しもだ白鳥を愛する会」が発足した。調達を、会員が手伝って
くれるようになり、それ
だけでもとても助かっ
ている」と姥名さん。
会場で「白鳥の家」啓
えた。

図6. しもだ白鳥を愛する会会員による間木堤清掃作業(テリー東北, 平成14年12月6日).

のフォーラムでは、専門家を講師とする基調講演、そして行政や自然保護団体、関係団体を交えてのパネルディスカッションを行った。この話し合いの場が、望ましい自然環境を創造するきっかけとなることを強く期待している。

⑤学校教育との連携

間木堤の自然を創造するための取組みは、「先人から受け継いだ自然資源（＝財産）を、我々現代人が自信を持って次世代へ継承すること」を最大の目的として据えるべきであると考えられる。

このような目的を大前提として設定するならば、「次世代（＝現在の子どもたち）」と連携した保護・創造活動を展開していくことは必要不可欠である。この考えから、特にマコモ栽培活動においては、子どもたちをからめて活動を行っているところである。泥だらけになりながらマコモを植え付けることにより、「間木堤の自然は自分たちの手で創りだすのだ」という意識を持ってもらい、自然環境を大切に思う心を醸成するきっかけとなれば幸いである。

おわりに

望ましい環境を創造する最大の目的は、前述のとおり「先人から受け継いだ自然資源（＝財産）を、我々現代人が自信を持って次世代へ継承すること」であると強く確信するところである。

この目的に向かって確実に前進するためには、更なる行政と関係者・関係団体の密接な連携、そして他の地域との情報交換を行い、それを活かしていく必要がある。東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワークやラムサール条約登録地を始めとする先進地の例を十分に参考にし、情報を交換し合うことにより、地域が一体となっ



図7. マコモ栽培を行う子どもたち。

て自然環境の保全及び創造に取り組みたいと考える。

おわりに、このような貴重な場を設けてくださった日本白鳥の会会員の皆様、そして間木堤の自然環境創造活動に多大なるご協力をいただいているしもだ白鳥を愛する会会員の皆様、木内々小学校の皆様、日本野鳥の会青森県支部の皆様をはじめとする関係者へ、この場を借りて深く感謝申し上げます。